

島崎藤村の詩の工夫（承前）

—構成を中心に—

橋口晋作

明治三十年

一月発行の「文学界」第四十九号に「若菜」の総題で六篇の詩を発表している。「若菜」詩群も、「うすごほり」詩群に近く殆ど四連以上（「天馬」のみ三詩）となっている。一連の行数も、一連四行が「明星」「若水」「酔歌」と半数に止まり（但し、「春の歌」も繰り返しを除いた部分は四行である）、「新暁」は三行、「春の歌」は六行（前記のことはある）、「天馬」は各詩の行数が異なると、同様に多様である。従つて、「若菜」詩群は、形式上は「うすごほり」詩群をほぼ継承したものと言うことが出来よう。

これら六篇の詩の中で行数の最も多い「天馬」は、「一葉舟」詩群の「二つの声」の発展形と言えよう。この詩は、三つの詩から成り、各一連の「雄馬」、「牝馬」の前に、これも一連の「序」が付いている。「序」は、雄馬と牝馬が一对の天馬であることを描き出したところである。しかし、箱根山の北と南とに産まれたので、別々の生を辿ることになり、雄馬は南下して、琵琶湖の辺で雄々しく生きるが、牝馬は逆に北上して、陸奥で嘆きながら死んで行くことになる。「序」は五十九行、「雄馬」は七十行、「牝馬」は九十七行と次第に長くなっている。「牝馬」が最も長いのは、やはり恋人であった佐藤輔子が意識されているからである。^(注二) 叙事・物語詩的で、各

詩の行数が一見明らかに異なるという点は、「二つの声」と異なる。

「若水」と「新暁」は共に四連から成り、繰り返しの部分が多い点も共通している。「若水」は、前二連が「・・・ぬ わかみづを きみと・・ま かのいづみ」の繰り返しになっているのに対して、後二連は「かのわかみづと みをなして」の連頭二行が繰り返しとなっている。一方、「新暁」は、四連を通して第二、三行が「・とならばやあけほの、・とならばや」の繰り返しとなっている。「若水」は、右の繰り返しから、前二連と後二連の二部構成と認められる。「新暁」は、繰り返しは四連共通だが、転生の対象が前二連が「雲」と「空」、後二連が「水」と「草」と天上・地上で別れている。従つて、これも前二連と後二連の二部が意識されていると考えられる。なお、「新暁」は、「秋の夢」詩群の「知るや君」の形式を下敷きにしていよう。

六連から成る「春の歌」は、「若菜集」中の類似の表題の詩の中で最も評価の高い詩である。早く共同研究「若菜集」の詞づかいと詩法・背景^(注二)で指摘されているように、この詩は「一葉舟」詩群の「秋のうた」の形式を踏まえている。しかし、「秋のうた」の倍の連数となっているこの詩は、さまざまなものに積極的な春への動きを命じて行く六つの連の二番目に冬を形容する言葉を畳みかけた連を配したところに絶妙の姿があると見られる。従つて、この詩は、その前の第一連、それから第二連、そして第三連以下の三部構成になるのであるが、構成などと物々しく呼べないような調べの変化とその配置に味わうべき点があると見えよう。

「若菜」詩群で最も多い七連から成る詩が「明星」「醉歌」と二篇ある。

「明星」は、明星が「人の世近く来る」ことを詠じた第一連から第三連まで、朝の様子を詠じた第四連から第六連まで、それに結びの第七連の三部構成である。第一部では第一連と第二連が「・・・と身をなして・・・に出でざれば などしるらめや明星の・・・を」の繰り返しを持ち、第二部もはじめの第四連と第五連がそれぞれ海と陸地の曙の情景を描き出したものとなっている。(二・一)(二・一)(一)という連のまとまり具合にもその妙があると思われる。「明星」は、「ことしの夏」詩群の冒頭の「新しき星」を受けた作品とされている。^(連三)確かに「新しき星」に通じる点がなくもないが、その世界を一新した、象徴性のあるものとなっている。「醉歌」は、明治二十九年九月発表の「夏の夜」を下敷きにしているように見える。「夏の夜」で子供の詩人は母親になかなか自分の「歌」を見せなかつたが、この「醉歌」では逆に「我」は「君」に自分から「袂の歌草」を差し示しているようである。筆者は、この詩は第一連と残りの六連とに分かれていると考える。第二連以下の六連は「歌草」そのものではなからうか。「君」に示したこの「歌草」の部分は、酒などに酔うことを勧める表現を最後に置く三連ずつの二つの部分に分かれる。前三連は、青春を悩み苦しんで生きる「君」への忠告という形を取る。そして、「君」を「旅人」と呼び、「ものぐるい」と捉えたりする。後三連は、「君」が「世の智慧に老いにけらし」という指摘で始まっている。「醉歌」という表題は、「君」に「酒」などで「春」を享受するように呼びかけることに由来するのであろう。

「天馬」「新暁」「春の歌」「明星」「醉歌」の五詩が前年十一月発表以前の自作の詩を踏まえているのだが、それぞれに面目を一新して、この「若菜」詩篇の充実振りが伺える。

二月発行の『文学界』第五十号に「さわらび」という総題で、五篇の詩を発表している。この詩群では、「潮音」「松島瑞巖寺に遊び葡萄栗鼠の木彫を観て」の二篇が一連だけで成っている。一連だけの詩が二篇もあるのは、「草影虫語」詩群以来である。しかし、「草影虫語」詩群はすべて三連以下であったのに対し、この詩群には「草枕」という三十連から成る詩も含まれている。一連だけの詩「潮音」は、一行が七音五音交互(但し、最終行は七音)となつてい、表記も「琴」以外はすべてひらがなである。もう一つの「松島瑞巖寺に遊び葡萄栗鼠の木彫を観て」は、甥の高瀬兼喜と松島へ遊んだ時の作品と言い、^(連四)その成立事情が珍しい。また、この詩群には、「春の歌」「佐保姫」と一連六行の詩が二篇もあるのが注目される。

三連から成る「春の歌」は、各連の最初の二行が繰り返しとなっている。「若菜」詩群の「春の歌」と対照的に、四行の後に「あ、よしさらば・・・うたひあかささん春の夜を」という繰り返しが付いている。一方、この詩は、内容的には「若菜」詩群の「醉歌」に依っていると見られる。それは、この詩の第一連に「若き命は春の夜の 花にうつろふ夢の間」という表現があったり、繰り返し中の変化する語「・・・」に「美酒」「花影」「琴の音」が入ったりするからである。従って、この詩は、「醉歌」の「歌

「草」を示されて虚を突かれた青年「君」が「春」に目覚めて、「たもとにほふ梅の花」を見付け出すに至るという後日談的世界と見ることが出来るのである。

四連から成る「佐保姫」は、第一連と第二連以下の二部構成である。第一連は、眠っていた春（佐保姫）が呼び覚まされたが、「まだ夢のまの風情」であることが記されている。第二連以下の三連は、それぞれ第一行に「ねむげの春よさめよ春」という呼びかけを置き、次いで、この佐保姫への一続きの促し、即ち、第二連は衣を身に纏うこと、第三連は髪を整え、飾ること、そして、第四連は戸外に出て、「たえなるはるのいきを吹」くことが促されて行く。身仕舞いの順序に従って促しているので、子供の外出を待っているような味わいがある。

「さわらび」詩群唯一の長詩「草枕」は三十連から成っている。この詩は自伝的で「藤村の青春の全重量がおりこまれてい」と言われている。^(注五)

「草枕」の構成については、関良一に「第九節までが序で秋、第十九節までが破の前半で宮城野の冬、第二五節までが破の後半で冬の海での望郷の思いを述べた部分、以下が結びで幻の早春のイメージを詠じた部分」という指摘がある。^(注六) 序は秋、旅に出て宮城野に辿り着くまで、破は冬の宮城野での暮らし、急はその宮城野で春に巡り会ったことということになるか。序とされた九連は、更に三連ずつに分けられる。最初と最後の三連は、「われ」が旅に出たことを述べているが、後ろの第七連から第九連までが具体的に地名を記すようになって行くのに比べれば、前第一連から第三連まで

は序の序といったところである。真ん中の第四連から第六連までは、その旅に出た理由・背景が語られている。破は宮城野の郊外、町、海辺から成っている。関が破の前半とした十連は、宮城野の郊外を場面とした七連と町の人を描き込んだ三連から成っている。破の後半は宮城野の冬の海辺である。このところを関は「冬の海での望郷の思いを述べた部分」と見ているが、「望郷の思い」は郊外での「都のかたをながむれば」にも出ているので、特筆すべきこともなからう。また、関は破の部分を第二十五連までとしているが、筆者は第二十四連までと捉えたい。第二十五連から始まる急は、春の訪れを描く部分である。この六連は、三連ずつに分けられる。前の三連は荒磯で鶯の声に気づくまでである。そして、後の三連は春の訪れを確信して、遠く眺めるところで「草枕」をおさめる。関は「幻の早春のイメージ」と言うが、筆者には「幻の」などは不要に思われる。なお、前記「潮音」は、この急の末尾にある「潮の音」と不思議な対応を見せている。

「若菜集」中の初出未詳の詩「春の曲」についてここで触れて置きたい。筆者は、この詩の初版「若菜集」における位置について、別稿「初版『若菜集』の構成とその世界」^(注七)で「春の到来を謳歌した詩で、この一連の詩の結びに相応し」と考えた。このことから成立時期を予測すると、二、三月ということになるか。^(注八)「春の曲」は五連から成る詩である。この詩については、関良一に「春の到来を明るく賑やかな音曲の伴奏をともなった舞

台のさまにたとえて詠った作」という解説がある。^(注五)五連は第一連、第二、三連、それに第四、五連の三つの部分に分けられる。第一連は冬が終わって春が来たことを、鼓の音を入れて、舞台の場面の変わりに見立てている。第二、三連では、霞の棚引いている光景を舞台の幕が引かれている状態に見立てている。第四、五連は、春の舞台の主人公である小蝶や鶯を擬人化して、舞台の登場人物に見立てている。賑々しい世界になっているが、小蝶も出て来るので、早春ではあるまいと思うのだが。

五月の『文学界』第五十三号に長詩「鶯の歌」一篇を発表している。長詩一篇のみの発表は、三月の『帝国文学』に「深林の逍遥」を発表したのに習ったものであろう。この詩から第二詩文集「一葉舟」の所収作品が始まる。この詩は、一連四行の十五連から成っているのであるが、一行が七五七五の二十四音となっている。この一行二十四音という形式は、早く明治二十八年七月の「ことしの夏」詩群の「与作の馬」にその萌芽があった。しかし、「与作の馬」では、一行の七五と七五の間に繋がっていないことを示す空白があったが、この「鶯の歌」にはそれがなく、完全に二十四音となっている。一行二十四音は、この詩の新機軸である。

さて、この詩も叙事・物語詩的で、老若二羽の鶯には北村透谷と藤村の関係が託されていると^(注一〇)考えられる。この詩は、嵐の襲来、嵐の空を窺う二羽の鶯の様子、老鶯の嵐と戦う様子、嵐の後の空に舞立つ若鶯の四部から成っている。嵐の襲来の部分は、最初の四連である。この部分は、嵐の

襲来を描く連と鶯の様子を描く連が一組になって、時間を追って激しい嵐の襲来を描き出して行く。次の嵐を何う二羽の鶯の様子を描く部分は、第五連から第九連までの五連である。この部分は、第五連と第九連の老鶯の描写が二回の二羽の鶯の描写を挟むという形になっている。老鶯の描写が中心になっているのは、この詩が嵐と戦って死んだ老鶯を中心しているかに違いない。第三部は、第十連から第十二連までの三連である。若鶯の目が捕らえた老鶯の嵐と戦う姿とその最期である。第四部は、残りでも三連である。嵐が去り、岩陰で命を繋いだ若鶯を描き出して、この叙事詩風の作品は終わる。詩人への試練の時期を凌ぎえたという思いが、この詩を生んだかと思える。

八月の『新著月刊』に長詩「四つの袖」を発表している。しかし、この詩は、「一葉舟」にも、その後の詩集にも収載されなかった。詩集に収載されない詩が出てきたのは、前年十月の「一葉舟」以来である。この詩も、主人公「われ」の「君」に対する恋の始まりからその成就までを、「われ」に即して詠じた叙事・物語詩である。一連四行、一行十二音が基本であるが、途中二箇所（六連と四連）七音五音交互のところが出てくる。これは、「深林の逍遥」に習ったものと考えられる。この詩は、「われ」が「君」を恋するようになったところ、恋いに覚めたと思うが、なお酔っている情況、久しぶりに「君」に会って真つ黒に傾倒してしまうところ、「君」と別れて苦しんでいるうちに再び巡り会うところ、夜、「われ」を求めて彷徨う「君」

に巡り会い、結ばれるところの五つの部分から成っているようである。^(注二)最初のところは、「きみに一葉をつながばや」と、「君」への恋を抱いた「われ」が「こひする神」に祈る「五」までと、「こひする神にさそはれてこひす」という情況に陥る「六」から「十三」までの二つの部分から成っている。次のところは、「ふとわがこひを忘れけり」という「十四」から「いまだ酔ふらし」という「二十六」までと考える。この間、「十九」からの六連は、第一行に「いづこをよしとうたふべき」という言葉を置いて、「君」の「かはるふしなき」ことを「うた」おうとしながら、実際は麗しいことを「うた」ってしまうということになっている。三番目のところは、「君」と「たえて久しきめぐりあひ」をして、「春衣の 君のすがたぞうつくしき」と「盲にかへる」「二十七」から始まる。このところは、「君のすがた」に改めて見られたらしいことを記した「三十一」まで、その後、夜にかけて二人が散策したらしいことを記す「四十六」まで、その夜「君」と別れたが、「君こひしたふものあらば こひやわたらんわれもまた」といった情況に陥ったことを記す「五十」までの三つの部分に分けられそうである。このところの「四十一」からの六連は、春の夜をたたえる七音五音交互の調子になっている。四番目のところは、「五十一」から「八十九」までである。このところも、「君」と別れ、「こひのほのほ」は止まず、「われ」は、「なぐさむすべもありやとて ひとり友なくさまよ」うことを記した「六十三」まで、夏の朝、再び「君」にめぐり合い、夜を待ちわびて昼を送る「われ」を描く「七十三」まで、夜になったが、「ながきわかれと なり

ゆかば」という恐れを感じ、「君」を「よびまどふ」「われ」を描く残りの三つの部分に分けられそうである。この間、「七十五」からの四連は、月光を詠じた七音五音交互のところとなっている。この調子のところを前のところと比べると、安らぎと不安と対照的になっているのであるが、このよな工夫にもかかわらず、今ひとつ印象が薄い。また、「五十九」で、季節が夏に移ったことが記されているのだが、時間の感覚はあまり明確になっていない。最後のところでは、「君」も「心のやみに迷ふ身か」「われ」を求めて夜を彷徨っていたということ、めでたく「われ」と「君」とは結ばれることになる。この「四つの袖」について藤村は、自序に「おのれ四つの袖なる題のもとに、およそ四つの歌の実をおさめんとのがひあり」と記していた。この自序によれば、この「四つの袖」は、男女の愛の諸相を描いた作品の二つ目ということになる。藤村は、「春の歌」を『若菜集』に二篇収めているが、この時期、男女の愛が藤村の詩の主題に成ってでもいたのであろうか。

九月発行の『文学界』第五十六号に「巴」という総題で、七音五音交互の一連八行、偶数行は四字下げという同じ形式の詩三篇を発表している。この形式などは、前年三月の「うたたね」詩群（ただし、「うたたね」詩群では、一連四行で二連という形になっていた）にならったものと考えられる。三篇とも三連以上から成っている。また、いずれも、かつて魅力的であったものが、時とともに色褪せてしまったことを嘆く内容となっている。

これは、前月末に刊行された初版『若菜集』の詩が意識されているからに違いない。

「巴」詩群の最初の「春やいづこに」は、三連からなる詩である。この詩は、最後の二行が「あ、一時の 春やいづこに」の繰り返しとなっている。その前の六行は、第一、二連が柳や草の春から夏への変貌を対比して、客観的に捉えているのに対して、第三連が変わり果てた梅や桜の姿を主観的に捉えているという違いがある。また、第一、二連には、第五、六行が「いま（今）は〔修飾語〕〔名詞〕」の繰り返しということもある。従って、この詩は、第一、二連と第三連の二つに分けることが出来る。なお、『二葉舟』に収載する時、各連の前六行は、一行十二音の三行に改められた。そして、繰り返しのところ、四行目（元の七行目）は二字下げ、五行目（元の八行目）は六字下げと大きく体裁が改められた。もともと「春やいづこに」は、「巴」詩群の中で連数が異なるという違いをもっていたのだが、藤村は、『二葉舟』に収める時、その違いを拡大させて、巴色を完全にうち消したのである。

「銀河」と「きりくす」は共に四連の詩である。「銀河」も二部構成で、第一連が千年が経過したという事実を述べるのに対して、第二連以下の三連はその結果に対する作者の思いを記して行く。作者の思いは、疑問、呼びかけ、嘆きと展開している。第三連で織り姫に言及し、第四連で旨く纏められている。「きりくす」は、「二匹のおおろぎの唱和というかたちをとっている。」と指摘されている。^(注二二)しかし、「唱和というかたち」は問題で、

第二、四連には言葉が認められるが、第一、三連は地の文なのではないかと見られる。前二連では聞く方のおおろぎ、後二連では歌う方のおおろぎの意見が記される。従って、この詩も二部構成ということになる。なお、この詩は会話が認められるので、別稿「島崎藤村の対話・劇等の詩の構成と内容―『若菜集』以後の詩について」^(注二三)で取り上げるべき作品であった。

「巴」詩群の三つの詩の「二葉舟」への収載については、日本近代文学大系一五『藤村詩集』『二葉舟』の頭注で、「『二葉舟』では「おちば」と総題された詩五篇のはじめに「春やいづこに」、三番めに「銀河」、五番めに「きりぎりす」をおき、この三篇のあいだに叙事詩ふうの「鶯の歌」と「白磁花瓶賦」を配して、均衡のとれた構成に配列しなおしている」と指摘されている。五月から九月までの詩が収められている訳であるが、この期間は、『若菜集』を編集し、刊行した期間であった。

明治三十一年

六月に『二葉舟』を刊行して二月後の八月の『反省雑誌』第十三卷第八号に「夏の夢」という総題で六篇の詩を発表している。この詩群は、第三詩集『夏草』よりも前に発表されているが、詩群中の一篇「緑の蔭」が第四詩文集『落梅集』に収められている（残り五篇は、『夏草』にも、『落梅集』にも収載されていない）。六篇の中、「古径」のみ一連で、他の五篇は五連以上から成っている。この詩群には、一連六行の詩が「朝の歌」「この夕」「夏の歌」と、半数の三篇もある。「故径」は、「夏の夢」詩群中唯一の

七音五音交互の詩で、全四十八行、偶数行が四字下げという体裁である。これは、一連から成っていること以外は、前年の「巴」詩群と同じ形式である。

さて、この詩群には五連から成る詩が「朝の歌」「この夕」と二篇ある。

「朝の歌」は、第一連から第四連までと第五連の二部構成である。第一連から第四連までは、更に、夜が明けたことを描く第一、二連と春が終わったことを描く第三、四連に分かれる。第五連はその夏の朝に呼びかけるといふ内容になっている。この詩は、命令の表現の置き方に特徴があり、第二連、第四連の一行目に命令の言葉があり、第五連は三つの命令文から成っている。「この夕」は、第一、二連、第三、四連と第五連の三つの部分から成っている。しかし、第三、四連は「かゝる夕か」を二つずつ並べたものになっている。第一、二連に意味上附着する傾向がある。従って、「朝の歌」との構成の差はそれ程ない。

六連から成る「蛙の声」は、一連八行の詩である。この詩は、第三、四連の後半に「……いでて……(連用中止) 歌……に似ざりけり」の繰り返しがある。そして、ここを挟む前の二連では、蛙の鳴き声を「魔の吹きすさぶ笛か」と聞こえると言つて嫌悪しているが、後の二連では、その声を「夏の歌」として厭うまいとしている。三つの部分に分かれるが、繰り返しの部分は、蛙の声を否定的に捉えている点では第一、二連に近く、「この夕」と同じ構成と言えよう。

「緑の蔭」は七連から成っている。先に記したようにこの詩のみ「落梅

集」に収載されたが、その時、表題は「緑蔭」に改められている。この詩は、第一連、第二、三連、第四、五連、第六、七連の四部構成となっている。第一連は、幼友達なのであるうか、「われ」が「君」と遊んでいたことを述べている。第二、三連では、成長して、「われ」は「また相見んと願ひ」ながら「君」と別れたことが記されている。第四、五連では、「君」を思いながら流離の日々を重ねたことが記されている。最後は、夏、都に帰つて「君」と往時を語り合うという場面となっている。この詩について、剣持武彦氏は、「夏草」所収の劇詩「農夫」との関連を指摘されているが、筆者は、「於母影」の「笛の音」の「少年」と「姫」の出会いと別離をふまえながら、結末を二人がめでたく再会するという筋に改めたものではないかと考えている。ほかの詩は、理屈っぽかったり、内容が平凡であったりするが、この詩は、流離の情が流れていて、収載されただけのことにはある。

「夏の歌」は、「夏の夢」詩群で最も長く、八連から成っている。この詩は、春が過ぎて夏になったことを述べる前四連と、夏の暑さに閉口していることを詠じる後四連とに分けられる。前四連は、夏の到来を語る連が春を点出する第二、三連を挟むという形になっている。これに対し、後四連は二連ずつで、第五、六連では夏の暑さを描き、第七、八連では「緑の蔭」に逃げ込もうという気持ちを記している。この詩は、四連ずつ二等分しながら、その中の構成を変えているところに工夫が認められるが、内容は、平凡という外ない。

十月発行の「学窓余談」に「かりがね」を発表している。この詩は、第三詩集「夏草」に収載された。「夏草」詩中、唯一の既発表の詩である。

「かりがね」は、「夏の夢」詩群の「朝の歌」「この夕」と同じく、一連六行、五連から成る詩である。この詩は、雁の鳴き声が涙を誘うことを記した第一連、その理由について考えた第二、三連、それから、雁に誰も止めないから、思いのままに鳴くようにすすめる第四、五連の三つに分けられようか。雁の鳴き声を「秋の日のさみしさ」という伝統的情緒に求めたところに、逆に象徴性が生まれたと言えようか。

「かりがね」は、「夏草」では、「月光五首」「新潮」という「夏草」的長詩の間に、春の「うぐひす」と並んで置かれている。

十二月に「夏草」が発行された。この詩集には、十四篇の詩が収められている。その中、「かりがね」は既発表の詩である。また、「農夫」は劇形式の詩となっている。この二篇を含め、この詩集中の詩には二連以下の詩はない。一方、一、二という番号の付いた詩から成る詩が「月光五首」「新潮」「天の河二首」「婚姻の祝の歌」と四つもある。「夏草」は、三連以上の詩からなり、連作、劇詩といった新たな工夫や、書き下ろし詩集という新たな発表方法で、新規詩直をはかった詩集だったように見える。

「落梅」は、「夏草」中最も連の数が少なく、三連から成る詩である。この詩は、上田敏訳サツフォー「忘れたるにあらねども」を換骨奪胎したものと見なされている。^{注五}時間の推移に従って描きながら、第二連で一つだけ

残った梅を擬人化したのが、この詩の眼目であろう。

「高山に登りて遠く望むの歌」は六連から成る一連六行の詩である。この詩は、「高山に登り」、「わがゆくさきの山河」を前に見渡している五連と振り返って雲に隠れた故郷の方を見た最後の二連に分けられる。前五連は、更に、「高山に登りて遠く望」んだ時の気分を述べた第一、二連、未来の人生を象徴するかのような鶴隼と河波の様子を描いた第三、四連と、「時を得てはるかに揚るわが心」を叙した第五連から成っている。「わがゆくさきの山河」を前にして詠じているこの詩は、「ふりかへり いく山河をながめて詠じた「うすごほり」詩群の「おえふ」と対照的なことになる。

「二つの泉」は、七連から成る詩である。この詩は、各連の行数が、二、四、四、四、六、六と変化している。また、第三、四連と第五、六連がそれぞれ冷泉と温泉の対句になっている。従って、この詩は、ここと、ここを挟む冒頭の二連と最後の二連の三部構成になっている。行数の変化と部の区切れがずれ、各部の連数も異なるところに、作者の工夫があるのだろう。二十九年九月の「草影虫語」詩群の「新泉」も形式の変化に富んだ詩であったが、この詩はそれとは別な方向で形式を工夫している。

「うぐひす」は、八連から成る詩である。この詩は、第一連と第二連以下二つの部分に分けられるようである。第一連は、作者から読者への案内で、鶯の「すぎこしかたの思ひで」を聴くように促している。第二連から後の七連は、その鶯の言葉ということになろうか。従って、「若菜」詩群の「醉歌」と同じ構成ということになる。鶯の言葉の部分の第六、七連は

「・・・て・・・を・・・ざれば 誰が身に・・・む・・・を」の繰り返しとなっている。ここを挟む前の方第二連から第四連までは、「はじめて谷を出でしとき」が語られている。繰り返しの部分は、冬を知るもののみが春を知りえるものであることを述べている。繰り返しを挟む後の残り二連は、この二連を受けて、冬を思い出して、春を享受しようと歌っている部分である。この二連は、鶯の声であると同時に作者の言葉でもあるようである。「藤村の詩人としての自覚」が託されていると指摘されるのもこのようなことを踏まえてであろう。

「わすれ草をよみて」は、「わすれ草」について記した文と藤村のこの遺稿集に寄せた詩から成っている。「若菜集」の「哀歌」と同じような作品だが、島田愛子の作品を上げていない（文に一首引かれているが）ことが異なっている。詩も同じ形式だが、十一連と二連少なくなっている。この詩の第一連は、文の終わりに引いた愛子の歌の表現を受けたものになっている。この詩では第七連と第八連が対句仕立て、第六連はこの二連を導く連となっていて、この三連が一まとまりになっている。この三連を挟む前、第二連から第五連までは、二年が経って遺稿集が出、改めてその死を悼むことが記されている。後の第九連から第十一連までの三連は、生きているものは皆死ぬのだから、恐れることなく、安らかに眠れと呼びかけていて、『若菜集』「母を葬るのうた」と同じような内容となっている。この構成のあり方は、「うぐひす」と同じである。

(注一) 日本近代文学大系15『藤村詩集』(昭和四六年一二月)所収「若菜

集」(関良一担当)の頭注など。

(注二) 『解釈と鑑賞』(昭和三三年三月)。

(注三) 注一に同じ。

(注四) 『早春』(昭和三三年三月)の自解による。

(注五) 注二の共同研究。

(注六) 注一に同じ。

(注七) 『近代文学論集』(平成一六年一〇月)。

(注八) 『島崎藤村全集』(昭和三一年一二月)は、この詩を「若菜」詩群と「さわらび」詩群の間に配置している。「成立時期」という言葉を

使っているが、発表月の意識が大きい。

(注九) 注一に同じ。

(注一〇) 笹淵友一『文学界』とその時代(昭和三五年一月)の第七章

「島崎藤村」第九節「一葉舟」による。

(注一一) 越智治雄『四つの袖』の周辺(『言語と文芸』昭和三五年一月)などを参照した。

(注一二) 注一に同じだが、担当者が剣持武彦となっている。

(注一三) 『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』(平成一六年一二月)。

(注一四) 注一二に同じ。

(注一五) 注一二に同じ。

(注一六) 注一二に同じ。

(平成十七年五月十日受理)